詩歌歴遊

大岡信対談集

大岡 信

詩歌歴遊

大岡信対談集

大岡 信

文藝春秋

著者略歴

昭和六年静岡県に生れる。東大国文科卒。読売新聞で十年間の記者生活の後明治大学助教授となり、現在教授。処女詩集「記憶と現在」で詩壇に確たる位置を定め、詩業のみならず評論活動にも旺盛な意欲を示す。朝日新聞掲載「折々のうた」で昭和五十五年第二十八回菊池寛賞受賞。「大岡信詩集」「紀貫之」「抒情の批判」「彩耳記」他著書多数。

詩歌歴遊

昭和五十六年五月三十日　第一刷

定価千四百円

著者　大岡信（おおおか まこと）

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

印刷所　理想社印刷

付物印刷　凸版印刷

製本所　大口製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Makoto Ōoka 1981　Printed in Japan

目次

草木虫魚　丸谷才一　5
花・ほととぎす・月・紅葉・雪　青木和夫　19
万葉集と大伴氏　竹西寛子　45
「百人一首」をめぐって　安東次男　63
芭蕉をどう読むか　ドナルド・キーン　107
伝統詩と現代詩　三好行雄　143
短歌の出発　子規とその前後　181
昭和の抒情とは何か　中村稔　213
中原中也と立原道造を中心に
言葉の花を継ぐ宴　佐佐木幸綱　253
伝統と表現について

装釘　坂田政則
カヴァー写真　垂見健吾
口絵写真　カメラ東京サービス

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

詩歌歴遊

大岡信対談集

草木虫魚

足柄の箱根飛び越え行く鶴の羨しき見れば大和し思ほゆ

読人しらず
万葉集巻七

夜は寒み夜床はうすし故郷の妹が肌はいまぞ恋しき

曾禰好忠
曾丹集

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲きける

紀貫之
古今集

かすが野の雪まをわけて生ひ出でくる草のはつかに見えしきみはも

壬生忠岑
古今集

ここにだにかばかりこほる年なれば越の白嶺を思ひこそやれ

曾禰好忠
曾丹集

妹が肌

曾禰好忠は生歿年未詳の平安中期の歌人である。生歿年が不明なのは彼が地位の低い官人だったからだが、作った歌は当時の異色として早くから有名になった。異色とされたのは、彼の歌が、当時最高の権威であり規範であった『古今集』の歌風から逸脱する奇抜な用語、斬新な題材をこのんでもちいたからである。彼の家集『曾丹集』を読むと、なにしろ人くさい歌人だったと感じる。作歌モチーフに、個人的な色彩が強い。それは、今月の歌として選んだ五首のうち、好忠の二首を、壬生忠岑、紀貫之の二首と読みくらべるだけでもわかるだろう。忠岑、貫之は、いわずと知れた『古今集』の代表歌人である。

凍豆腐を干してある写真は、福島市郊外立子山地区で撮ったものだそうである。古歌に凍豆腐をうたったものがあるだろうか。たぶんなかろう。さてどんな歌を合わせようかと思いながら『曾丹集』を繰っているうち、「夜は寒み夜床はうすし」の歌に目がとまった。豆腐を作る寒中の夜なべ仕事に思いが行き、この歌がいかにも写真にふさわしく思われてきた。

曾禰好忠は自分の歌才が正当に評価されないのに腹を立て、ときどき奇行に訴えたことで知られるが、「百人一首」に録された彼の歌は名歌の名に恥じない。「由良の門を渡る舟人かぢを絶え行方も知らぬ恋のみちかな」。

草木虫魚

冬の夢の驚きはつる曙に
春のうつつのまづ見ゆるかな
後京極摂政藤原良経
西洞隠士百首御歌

かつ氷りかつはくだくる山河の
岩間にむせぶあかつきの声
藤原俊成
新古今集・冬

下きゆる雪間の草のめづらしく
わが思ふひとに逢ひ見てしがな
和泉式部
後拾遺集・恋

ふみわけぬながめも道やたえぬらむ
越のしらねの雪の曙
後鳥羽院
北野社百首

もののふの八十少女らが汲みまがふ
寺井の上の堅香子の花
大伴家持
万葉集巻十九

春のうつつ

後京極摂政良経は『新古今集』の撰者の一人でその仮名序を書いた人である。年若くして太政大臣になった彼は、和歌を藤原俊成・定家父子に学び、彼らの御子左家にとっては頼もしいパトロンであった。後鳥羽院の信任あつく、新古今時代の和歌をあれほどの高みに押しあげる上で、なみなみならぬ影響力を歌壇に及ぼした。三十八歳で一夜急逝し、愛惜された。家集を『秋篠月清集』というが、歌風もこの題名そのままに、気品があって澄明、天性の麗質を思わせる。掲出した「冬の夢の」の歌を見てもそれはいえる。意味だけとれば何ほどのこともない。

冬の「夢」と春の「うつつ」を対比させ、冬の夢が醒め（「驚き」は目がさめることをいう）、春がいよいよ現実（うつつ）になったことを言っているだけだともいえる。それでいて、歌にふしぎな張りと珍しさがあるのは、「冬の夢の驚きはつる曙」という表現に新味がある上に、その曙に「春のうつつ」が「まづ見ゆる」驚きを言う着眼点が、面白いからである。春が現実にやってきた、という意味を言うのに、彼は「春のうつつ」が見えると具象的な表現法をとっている。「春のうつつ」とは何か、といえば、冬の夢が醒めはてた「曙」そのものにほかならないが、この「うつつ」という言葉にはまた、上の「夢」という言葉が響いていて、それゆえ、春はまだ夢うつつにそこにたたずんでいるばかりなのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

はかなくて木にも草にもいはれぬは
心の底の思ひなりけり

香川景樹
桂園一枝・雑歌上

ちくま川春ゆく水はすみにけり
消えていくかの峯の白雲

順徳院
風雅集・春上

朝凪の海士の漁りぞ思ひやる
春のうららに日はなりにけり

藤原為家
建長三年毎日一首中

むさし野の春の気色もしられけり
垣ねにめぐむ草のゆかりに

慈鎮和尚
新勅撰集・雑歌上

天の川きし辺の桃や咲きぬらむ
空さへ花の色に酔ひぬる

権僧正公朝
六帖題・桃

はかなくて

ねこやなぎの写真に取合わせた香川景樹の歌には「独述懐」という題がついている。一見とりとめないようでいて、何度も読み返すうちにだんだん面白くなってくる歌だ。歌の表面上の意味は一応、「あまりにもはかなくとりとめないので、木にも草にも話すことができないのが、わが心の底の思いである」ということだが、これではまったく味も素気もない。じつは作者は、そういう心底の思いの「はかなさ」そのものに、限りなく興味をおぼえ、むしろその「はかなさ」があるからこそ、「心」は他の何物によっても替えることのできないものとなるのだ、と考えているのである。

香川景樹という人は江戸後期の歌人・歌学者中の大立者で、文政十一年還暦に達したときに編んだ『桂園一枝』という歌集で知られている。門下は桂園派とよばれ、全国的に勢力を張った。歌は「理」ではない、「調べ」だ、とする立場に立って和歌革新運動に奮闘したが、『古今集』を重んじる立場だったので、古今嫌いを標榜した正岡子規に否定され、損な役まわりとなった。

しかしこの人の「事につき時にふれたる」歌、つまり思索・内省・述懐の歌は、彼が学んだ禅の影響もあって、なかなか興味ぶかいのである。子規はそんなところまでは見ることができなかった。「寄夢懐旧」と題して、「老ぬればいとどむかしのみゆるかなわかきは夢のこころなりけり」のような歌がある。

風かよふ寝ざめの袖の花の香に
　かをるまくらの春の夜の夢

藤原俊成女
新古今集・春下

世間を憂しとやさしと思へども
　飛びたちかねつ鳥にしあらねば

山上憶良
万葉集巻五

露ばかりあひそめたる男のもとへ
しら露も夢もこのよもまぼろしも
　たとへていへば久しかりけり

和泉式部
後拾遺集・恋四

人も無き国もあらぬか吾妹子と
　携ひ行きて副ひてをらむ

大伴家持
万葉集巻四

鶯の声ものどかに鳴きなして
　かすむ日影は暮れむともせず

藤原（京極）為兼
風雅集・春

かをるまくらの

王朝和歌を読む時「花」といえばまず「桜」を考えるのが常識で、この観念は俳諧にまで受けつがれた。つまりそれほど、桜の花は花の代表とされたわけで、それだけに、桜をうたった歌は古今におびただしい。そのおびただしい歌の中から俊成女（俊成が晩年に養女とした女性で、俊成の孫に当る越部禅尼と同一人といわれる）の歌をここに選んだのは、この歌のくるくる旋回してゆく叙法の中に、湿り気を帯びた日本の春の、少し淫らで、物憂く、さりとて沈鬱というのではない、むしろ浮き浮きした情緒・気分というものがたゆたっているからである。意味というほどのものはほとんど無いといっていい。そこにむしろ、王朝の春の情緒の典型的な表現があった。

これがもっと身にしみる表現になると、たとえば式子内親王の「はかなくて過ぎにしかたをかぞふれば花にもの思ふ春ぞ経にける」の一歌をあげればいいだろうか。

山上憶良の「世間を」の歌は有名な長歌「貧窮問答の歌」の反歌である。「やさし」は「恥ずかしい」の意。「痩さし」と同一語源だという。痩せるほどの思いという意味が根本にあるわけだ。

和泉式部の歌の白露・夢・よ（世）・幻。すべてまことにはかない瞬間の譬えとして用いられる言葉だが、それらさえ、私たちのはかない恋の逢瀬にくらべれば久しかったという嘆きである。「たとへていへば」という放胆な言い方が斬新である。

あやめかる安積の沼に風ふけば
をちの旅人袖薫るなり

源俊頼
散木奇歌集

ふきしをるけしきは見えて夏山の
若葉によわき風の音かな

藤原(冷泉)為相
正安二年夏百首歌

たのしみは野寺山里日をくらし
やどれといはれやどりけるとき

橘曙覧
志濃夫廼舎歌集

陸奥のしらをの鷹を手にすゑて
安達ケ原をゆくはたが子ぞ

能因法師
能因法師集

をかしく舞ふものは、巫小楢葉、車の筒とかや、平等院なる水車、はやせば舞ひ出づる螳螂、蝸牛。

梁塵秘抄

草木虫魚

をかしく舞ふもの

花菖蒲の写真に合わせた俊頼の歌にある「あやめ」は、香りのことを歌っているところからみて、端午の節句の菖蒲湯に葉っぱを使う例のショウブ（サトイモ科）のことだと思われる。それだと写真で用いた花ショウブ（アヤメ科）とは別ものだが、昔はショウブのこともアヤメといった。その言葉の縁でこのさわやかな風に乗る香りをうたった歌をあげることにした。

ショウブは葉の芳香が邪気を払うというので節句の景物となったが、黄緑色の花はあまり見映えのするものではない。しかし古来歌にはよく歌われた。一方、花ショウブは、いかにも観賞向きの大型の花を開くが、あまり歌われていないようだ。見てくれのいい花、必ずしも歌の好題材とはならなかったらしい。意味のあることだと思われる。

為相（定家の孫、冷泉家の祖）の歌の「しをる」はタワムの意。幕末の歌人曙覧の歌は、「たのしみは」の語を頭において作った五十二首の連作「独楽吟」の一。「たのしみは心にうかぶはかなごと思ひつゞけて煙草すふとき」という専売公社向きの歌もある。

カマキリの写真には、内容の面白さをとって、この場合だけは和歌でなく、平安歌謡集『梁塵秘抄』の一首を合わせた。螳螂、すなわちカマキリ。

草木虫魚

やまもとの鳥のこゑよりあけそめて
花もむらむらいろぞ見えゆく

永福門院
玉葉集・春下

ほととぎす声待つほどはかた岡の
森のしづくに立ちや濡れまし

紫式部
新古今集・夏

天の河流れてくだる雨をうけて
玉の網はるささがにの糸

西行
夫木和歌抄

草枕旅にもの念ひわが聞けば
夕かたまけて鳴くかはづかも

読人しらず
万葉集巻十

松浦河(まつらかは)の瀬光り年魚(あゆ)釣ると
立たせる妹(いも)が裳の裾濡れぬ

大伴旅人(推定)
万葉集巻五

花もむらむら

自然界をうつした現代の色鮮やかな写真を、草木虫魚を歌った古歌と組合わせて、そこに配合の面白さを生み出し、あわよくば自然界を見る上でのもう一つの視角といったものをとらえることはできないだろうか。そういう興味から、月ごとに何枚かの写真を選び、歌を選んでみるのだが、思うような組合わせはなかなか見つけられないものだという発見をした。写真の単なる説明になるだけでは、歌も死ぬし、何よりもまず写真が死んでしまう。さりとてまるで無関係な歌を選ぶわけにはいかない。

永福門院の歌にいう「花」。ただ「花」とあれば、平安朝以後江戸期までの歌や俳諧では、まず桜をさすと見ていいのだが、ここではそれを紫陽花(あじさい)の花の写真につけ合わせてみた。合わせてみるとなかなか映りがいい。

それにしても、草木虫魚の多様な生態にくらべれば、古来人々が歌ってきた自然界の範囲は限られていたものだと思わせられる。時代時代に特有の趣味があって、その趣味の窓を通して自然を切り取っているからである。

淡路の野島が崎の浜風に
妹が結びし紐吹きかへす

柿本人麻呂
万葉集巻三

もの思へば沢の螢もわが身より
あくがれ出づる魂かとぞ見る

和泉式部
後拾遺集

ここにありて筑紫やいづく白雲の
棚引く山の方にしあるらし

大伴旅人
万葉集巻四

夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふ
あまつそらなる人を恋ふとて

読人しらず
古今集

夏深き入江のはちすさきにけり
波にうたひてすぐる舟人

藤原良経
秋篠月清集

雲のはたてに

写真にある植物は最初が浜昼顔、二番目のは日光キスゲ、つづいてカワセミ、螢、蓮。

朝顔や夕顔は古歌に数多くうたわれている。しかし昼顔や浜昼顔は、私の知るかぎり、奈良時代から江戸時代までの古い時代の歌の中では、ほとんど全くうたわれたことがないようだ。一方、俳諧の方では昼顔（浜昼顔も単に昼顔として出てくることが多い）は古くから題材になっている。「昼顔に米つき涼むあはれ也　芭蕉」「昼顔や煩ふ牛のまくらもと　蕪村」は昼顔だし、「昼顔や魚とり散らす砂の上　大魯」「大汐や昼顔砂にしがみつき　一茶」は浜昼顔の方である。朝顔や夕顔、また螢とか蓮は和歌で多くうたわれた題材だが、それらはほぼおしなべて、命のはかなさへの詠嘆とか、心の清浄境へのあこがれとかを象徴的にうたうための素材としてとりあげられている。素材そのものへの興味、関心からうたわれた歌は実に少ない。俳諧との大きな違いだろう。

そういうわけで、素材そのものの迫力と美を追求する写真と古歌との組合わせも、同一素材による歌と写真の組合わせというわけにはいかないことが多いから、いわば「匂い」で付けてゆくことになる。そこからもう一つの心象風景が生まれるようなら面白いのだが。

草木虫魚

夏山の夕下風の涼しさに
　楢の木蔭の立たま憂きかな

西行
山家集

浅茅原ねころびながら花見れば
　木枕にまず草まくらから

大隈言道
戊午集

海の底石著く白玉風吹きて
　海は荒るとも取らずは止まじ

読人しらず
万葉集巻七

夏か秋か問へどしら玉岩根より
　はなれて落つるたきがはの水

藤原定家
拾遺愚草

田の面より山もとさしてゆく鷺の
　近しとみればはるかにぞとぶ

伏見院
玉葉集・雑歌三

まかがやく日

与謝蕪村に青鷺を詠んだ名句がある。「夕風や水青鷺の脛をうつ」。青鷺の風情をとらえてこれにまさる作を得るのは難しかろう。朝陽が地平を離れて空に浮かぶ。その瞬間の朝焼けの中に青鷺のシルエットをとらえた写真を見ながら、私は夕風の中の鷺をとらえた蕪村の一句が耳もとで鳴るのを感じた。古歌の中にも鷺を歌った作は少なくなかろうと思ったが、探してみるとこれが案外に少ないので意外に思う。

少ないといえば、写真にある海辺のイカ干しの歌とかカブト虫をうたった歌なども古歌にはまるでなさそうである。和歌の題材は、そういう点でまことに限られていたものだとあらためて思う。ここで用いているイカ干しの写真は対馬の海岸だそうだが、私はこの海のきらめきを見ているうちに、釈迢空（折口信夫）の歌を思い出した。

青うみにまかゞやく日や。
とほ〳〵し姫が国べゆ　舟かへるらし

迢空の歌は熊野の海をうたったものだ。古い時代の歌を選ぶのでなければ、ぜひとも対馬の海辺の写真に合わせてみたい歌である。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo